
我こそは齊天大聖孫悟空也

雪月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我こそは斉天大聖孫悟空也

【Nコード】

N5586N

【作者名】

雪月

【あらすじ】

テンプレでワンピースの世界に転生した。もらった力はサルサルの実、タイプ「キンシコウ」……もどき。のんびり短文プラス鈍足月いち更新。気長に付き合える人向きです。

第零回 はじまり

お約束だが、

「ワンピースの世界に転生してもらおう。ひとつだけ願いを叶えよう」と言われた。

誰に言われたのかって？

俺には、後光の射した釈迦如来像に見えたよ。

約30センチくらいの、虫食いだらけで木目も朽ちているような、年季のある木像が目の前にぶかぶかと浮かんでいたんだ。

その存在は人間よりも高位に存在する精神集合体であり、人間に理解できるように説明するなら最も近い表現が「神」であり、各々のイメージで見える姿も変わるそうさ。

だから、人によってはモーゼに見えたり、ジーザスに見えたり、

サタンに見えたり、閻魔大王に見えたり、ご先祖様に見えたり、亀に見えたりするらしい。

亀って微妙だな。

でも悪魔も祖霊も神獣も、崇拜の対象と思えば納得できる。

……なんで木像なんだ俺。

それはともかく、釈迦如来の「何が欲しい」という問いかけに対し、俺は即座にこう答えたね。

「孫悟空になりたい！」

普通、ワンピースなら「
の実は能力が欲しい」とか答えるもの
のなんじゃないのかって？

まあいいじゃないか。

願い叶って、今の俺は岩から生まれた猿だ。

美猴王（びじうおう）と呼んでくれ。

第零回 はじまり（後書き）

はじめまして。

思わず書いてしまいました。

まだ海のものとも山のものともつきませんが、お見知りおきを。

なお、一話一話が短く、かつ更新も遅いです。（月末更新予定にしようかと）

発破をかけていただいたとしても、改善はされません。ご了承ください。

それでは、次回の講釈にて。

【備忘録】（前書き）

設定したのを忘れてズレることがあったため、再発防止の確認用。
追加されたり、削られたり、役に立たなかったりする予定。

ネタバレというか、先の設定分も遠慮なく書きこんであるので、要
注意。

【備忘録】

【猿王ゴクウ】

齊天大聖孫悟空

原作32年前 0歳 外見3歳 90cm

原作17年前 15歳 外見6歳 115cm

(ミホーク23歳 クロコダイル26歳 ドフラミンゴ21歳
ヤンクス20歳)

原作9年前 23歳 外見7歳 120cm

(ミホーク31歳 クロコダイル34歳 ドフラミンゴ29歳
ヤンクス28歳 サンジ10歳)

原作開始 32歳 外見9歳 130cm

(ミホーク40歳 クロコダイル43歳 ドフラミンゴ38歳
ヤンクス37歳)

外見年齢は主人公主観。背伸びしているから、実際はもっと幼く見られている可能性が高い。

ジュラキュール・ミホーク198cm

サー・クロコダイル253cm

ドンキホーテ・ドフラミンゴ305cm

バーソロミュー・くま689cm

ジンベエ301cm

獣型。

キンシコウがモデル。2メートル近い大猿 250cm。

ゴリラのようなマツチヨではなく細身。うしおとらの猿の変化イメージ。

全身が淡金色の毛に覆われて、かがんきんせい火眼金睛。

人獣型。

猿がベース。原始人とは言わせない。

全体的に毛並みは減り顔の輪郭も人に近い。

約半分の1メートルちよつと。150cm。

猿なのに、服を着て歩いていると普通の人間のように対応される。熊やパンダで見慣れているらしい。

人型。

肌は白い。血管が透けて見えるような赤みの差した白ではない。

細身の四肢。薄い脂肪も引き締まった筋肉もついていない。

薄い金色の髪、赤が混じる金目。

たれ目気味の愛嬌ある目。

左の胸に黒刀シルエットのいれずみ。

【服装】

ミホークの館に出入りする商人によるオーダーメイド。

基本はアジアンテイストで、赤の外衣と黒のズボンに赤のサツシュ。裾が絞られていない黒のズボン。

オオフグカバの皮製。伸縮自在で頑丈で軽い。

小人族から巨人族まで幅広く着られるフリーサイズシリーズとして好評。

赤の膝まであるノースリーブの長衣。

赤の腰布。

獣化すると、赤いチョッキと短パンな感じ。

他には、カンフー服っぽい赤に金の刺繍の服。アラビアンナイトっぽい青に黒の短い上衣と白のぼんたんズボン、など。

本人も知らない内に増えている。

ミホークの服も本人の知らない内に増えている。

そして商人と主人公の結託で、年々派手になっていく。

【猿船】

ミホークの補給船。

マスト一本の丸っこい小型帆船。

飲食料がほとんどを占める倉庫と、ユニットバス、主人公の個室兼キッチン、ミホークの個室がある。

クルーはこざるズ。

身外身の術で変化した毛。

50センチばかりの金色のこざる。

主人公ができることしかできない。

びっしょり濡れるほどに水を被ると、元の毛に戻る。少し濡れるだけならOK。

第壹回 岩から生まれた猿

ドカン！と轟音立てて割れた岩から生まれた俺は、随分と高い山
のてっぺんに仁王立ちしていた。

幾億もの雨風浴びて耐えるところから始まらなくて、なによりで
ある。

俺が「孫悟空になりたい」と言った時、釈迦如来像はその姿をポ
ンッ！と変えた。

猿の尻尾が生えた少年。

つんつんとした黒髪で、オレンジ色の道着を着たその姿はもちろ
ん。

「孫悟空という『ドラゴンボール』の主人公の」

「そっちな」

いやまあ確かに、孫悟空と聞いてその姿を思い浮かべる人は多いんだろうが。

というか「マンガ読んでるのかお釈迦様」と聞いてみたら、「もちろん」と返ってきた。

人間の知る全て、いや人間の知り得ないことまでの全てを知ってるってさ。

ああそっかい。きっとそれこそ人によっては『アカシックレコード』とか『真理』とか呼ぶんだろうよ。

考えてみたら最初から「ワンピース」って言ってるんだしな。

どっぴりと俗世につかったお釈迦様だよ全く。

それはともかく。

「スーパーサイヤ人になりたいわけじゃないんだ」

「猿にはなりたいのか」

その表現やめてくれない？

俺は野生の猿になりたいわけじゃない。

西遊記の、どこまでも人間くさい岩猿になりたいんだ。

そうか、と。次に現れたのは極普通の猿だった。

「では、アカゲザルということだ」

「それはないだろう」

思わず即座に否定した。

いやいや、だって俺ちゃんと野生の猿になる気ないって言ったよね。人の話聞いてた？

そりゃアカゲザルが孫悟空のモデルって言われているけど、俺としては俗説のキンシコウや、猿神のモデルのハヌマンラングールのほうがいいし。

かりかりと頭をかいた猿の姿が、またボンと音を立てて、サイヤ人（連載初期）の姿に戻る。

……もしかしたら気に入ってるの、その姿？

「ひとつの願いに注文が多いな」

注文っていうか、イメージと違いすぎたら文句のひとつやふたつくらい言いたくなくても、仕方がないじゃないか。

「人のイメージ次第でどんな姿にでもなる神さまが、俺のイメージする孫悟空が分からないなんて変だろ」

変だろ、変だよな。

釈迦如来像だって、イメージ通りと納得したわけじゃないけどな。

「……世界に孫悟空は無数に存在し、お前の中の孫悟空も数多く存在している」

そう言ったサイヤ人の姿が曖昧にぼやけた。

層気楼が幾重にも重なるように、いろんな姿に変わっていく。

ああ、そっだよな。

何度も読み返した小説だけじゃなく、たくさんの孫悟空が俺の中に存在している。

子供の頃見た人形劇。

ドラマやアニメの主人公たち。

ああ、そういえばあの映画のキャラクターのモチーフも孫悟空だっただけ。

京劇や影絵。……見た覚えがあるような、ないような。

俺が覚えていなかったものも、俺の中にはきちんと残っているらしい。

万華鏡のように、陽炎のようにゆらゆらと揺れるイメージ。

「じゃあ」

目指すはもちろん、いいところ取りで。

そんなこんななやりとりの後、なんとキンシコウをモデルに、動物系の悪魔の実に似た感じで、人型・人獣型・獣型になれるようにしてくれた。

気前がいいな、お釈迦様。

だから、今の俺は猿だ。

……あれだけ野生の猿はイヤだと言ってたのに何故かって？

だって今の俺、生まれたてのすっぱんぽんよ？

さて、よ。

俺は禿山の上で周りをぐるりと見回した。

どことだっしょ。

……とりあえず、山の名前は花果山でいいか？

第巻回 岩から生まれた猿（後書き）

書き始めてみるとなかなか難しいです。

まずは、ここをどこの海にしようか悩み中（そこからか）

孫悟空の出身からすると東の海の火山島がいいけれど、原作と違う他の海のほうが好き勝手にできますよね。

ともかく、もうしばらくは足場固めが続く予定です。
ワンピースっぽくなるのはいつだろう……。

それでは、次回の講釈にて。

第貳回 猿、滝つぼに落ちる

果花山（俺命名）はそれなりに大きな島の真ん中に位置していた。

巨岩が鋭い剣となって天に向かって聳え立ち、雲を貫くこの山こそは岩肌が剥き出しになっているが、後は緑豊か。

豊かすぎてジャングルっぽいな。

見るかぎりでは、町や村など人の気配はない。

周りの海の色は深い。

波は荒く、白く弾ける波頭から、ごつごつした岩がいくつも顔を覗かせている。

他の島影はなく、ぐるり四方を囲む水平線。

後は、青い空と白い雲だ。

くるんと周りを見渡して、視界が一周した勢いのまま、俺はとてんと尻餅をついた。

おや？

「キツ？」

なんだかバランスが変だ。

首を傾げて後ろを見ると、「やあ」とばかりに尻尾が揺れた。

こいつのせいか？

地面に手をついて立ち上がる時のように、尻尾を使って立ち上がってみる。

それほど、難しくはなかった。

尻尾だけの問題ではないようだ。

立つ足にもしっかり力が入らない。

回線がうまく繋がっていないような、全体が覚束ないような。

生まれたばかりだからか？

まずは成長し、そして鍛えろと？

おいおい。

不思議生物いっぱいこの世界、つまり危険もいっぱい盛りたくさんなはずの場所で、これはいただけない。

うつつ、急に持病の「森に入っただけいけない病」が、とか言ってる場合じゃないな。

身の安全を図れる場所を探す必要がある。

それに水と食いものだな。

よっ、ほっとうと。

巨大な岩々が連なる、切り立った崖の隙間のような場所をおっかなびっくり下りていく。

山を下るにつれて、岩肌が徐々に緑に覆い隠されていく。

まずは岩に張り付くような苔類、ちまちました草、低い木、気付けばいつしか蔓草絡む大木に頭上を塞がれたジャングルだ。

蔓でターザンのまねをしてみたり、枝から枝へと飛び移ってみたり。

慣れると尻尾も、他の手足と変わらずに使える。

グギャギャギャとかブオオオとか、やたらと物騒で狂暴そうな鳴き声や、バキバキと木が倒れるような破壊音が聞こえた時は、すぐさま方向転換した。

果実らしきものも、発見。

食えるのか、これ？

だって、ぶっちゃけ毒キノコ色だぜ！

うん、止めておこう。

無敵の胃袋は持っていない。

……はずだ。

キノコもあつたぜ、もっとヤバイ色だったけどな。

ああ、腹へったなあ。

熱帯雨林ばいってことはさ、バナナないかな。

ばーなな、ばなな。ばーななばかな。うきつ。

空腹に気を取られすぎて、その渓谷が目の前に現れるまで、俺は唸るような水の音に気付かなかった。

突然途切れる緑。

目の前に現れたのは、巨大な滝。

はるか頭上から、怒涛のように流れ落ちる爆流。

しかし、轟音立てる滝の壮大な自然の美に、俺は感動するのではなく、恐怖した。

首の裏から尻尾の先までの毛が、一気にぞわっと逆立つ。

逃げろ！

俺はパニックになった。

ほんのわずかでも遠くへ逃げることで以外は考えられなかった。

木の枝を大きく蹴り、跳んだ足の裏に妙な空気抵抗があったと思っただら、続く浮遊感。

ふわりと体が宙を泳ぎ。

バランスが崩れ。

落ちた。

気付くと固い地面に打ち上げられていた。

水の中でもがくことができたのかも、覚えていない。

渦巻く濁流。

恐怖心。

覚えているのはそれだけだ。

打ち上げられたそのままに、げぼげぼがぼがぼ、えづく。

ここは、滝の裏側に位置しているようだ。

怒涛のような水音が、耳鳴りのようにうわんうわんと頭の中に鳴り響き続ける。

水に侵食された洞窟なのか。

辛うじて無事だが、まだ体半分水の中だ。

水に体温を奪われて、更に体力気力が減っていく。

身体中が痛くてだるい。

意識も朦朧としている。

このままここで寝てしまいたい。

その欲求に身を任せれば楽になるのかもしれないが、しかし、ここで目を閉じたら二度と目覚めないのではないか。

俺はナメクジのように水の跡を残しながら、這いずるようにして洞窟の奥へと重い足を運んだ。

奥は思いの外広かった。

澄んだ水が鏡のように凧いだ泉を作り、湧き水が壁にいくつもの小さな滝を作る。

それらが天井の岩の隙間から射し込む光にきらきらと輝く様は美しい。

荘厳だった滝の神がかり的な姿とはまた違う、神秘の姿がそこにはあった。

しかし、俺にしてみれば周りを水に取り囲まれていて、ただ怖い。

なに、この本能。

必死で周りの水から逃げるようにして、洞窟の一番奥まで辿り着いた。

斜面になった水に浸されていない場所に、ぽつんと低木が生えていた。

俺は、その木の根元で丸くなる。

もう限界だ。

薄れゆく意識で思うのは、孫悟空の話。

他の猿たちに勇気を示すために滝壺に飛び込んで、水簾洞を見つけた石猿は猿の王、美猴王になった。

……つまりこれはあれだ。

水簾洞にしろということか。

水が怖いのに？

第貳回 猿、滝つぼに落ちる（後書き）

今回、場所移動のみ。

今回は、主人公の容姿説明っぽくなるかと。

どうにも進みませんが、もうしばらく主人公だけでぐずぐずします。

それでは、次回の講釈にて。

第参回 猿、洞に暮らす

あれから俺は、結局のところ水簾洞で暮らしている。

何せ俺は、水が怖い。

おかしな話だ。

俺は悪魔の実を食べたわけじゃない。

だから、海……というか水に入ったら脱力して身動きもできない、ということではなく、泳ぐこともできるはずなのだ。

第一、悪魔の実の能力者はシャワーや雨、流れる水ならいって話だったし、ルフィの奴はアラバスタで風呂を楽しんでいなかったか？

ハンコックもルフィとの出会いは風呂場だったよな。

それともあれだ、お色気シーンは別物なのか。

なんにしる、能力者は海を苦手としていたけれど、海を怖がってはいなかったはずだ。

俺は、本能に刷りこまれたかのように水が怖い。

流れる水も駄目だ。

こんなに水が怖いのは、泳ぎが得意なアカゲザルを嫌がったせい
か？

人型になれるようになった。

なれたというか、なつたというか、情けない話なんだが、一番水から遠いところに蹲って「逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ」と震えている内に人型になっていた。

人型が一番水に対する恐怖心が薄いようだ。

怖いものは怖いけどな。

獣型から人獣型、そして人型への変化は、尻尾並にすぐ慣れた。

獣型はキンシコウがモデルでも、2メートル近い大猿。

ゴリラのようなマッチョではなくて細身の体だ。

全身が淡金色の毛に覆われて、火眼金睛（かがんきんせい）。

人獣型はぐっと小さくなって、約半分の1メートルちょっと。

ベースは猿か？

元々人間のベースも猿だ。だから、四足歩行の獣よりも変化が乏しいのかもしれない。

毛並みは減っていて顔の輪郭も人に近いが、猿だ。

しかし俺はここで、大幅なサイズダウンのほうに疑問を持つべきだった。

猿にしちゃでかいとか、そういう問題ではなかった。

そう。

人型が問題なんだと、俺は（おそろおそろ）泉を覗きこむ。

肌は白い。

血管が透けて見えるような赤みの差した白ではなく、病的に青白い。

細身の四肢は、脂肪も筋肉もついていない。握ったら折れそうだ。

ほら、火垂るの墓のにーちゃんみたいに。

ほわほわの、綿毛のような金髪も柔らかい色合いで、全体の白いイメージに拍車を掛ける。

目だけは、白から遠く赤のきつい金目だ。

嬉しいことに、顔のパーツのバランスはいい。

しかし、精悍とは言えない。

きっと女の子に出会ったところで、「かわいい」と言われる頻度は高そうだけど、「かっこいい」と言われることはなく、恋愛対象になることもないだろう。

だって、まだ義務教育始まってないんじゃないかってくらいのがキだぜ！

サイズだって更にダウンして身長1メートルを大幅に切る、こつ

ぶっこだ。

ちくしょう。

生まれたてなんだから、首も座ってない乳飲み子じゃなかっただけマシだったと釈迦如来に感謝すべきなのか？

無理だ。

今、再び滝つぼに飛び込んだらどうなるか。

獣型では水への本能的な恐怖に身が竦み、人獣型でも同じく。その上、体力が足りなくてあの激流に負けるだろう。

人型？そりゃ言わずもがなだ。

考えれば考えるだけ外に出るのが面倒になる。

その上、ここはなかなか暮らし勝手がいい。

身の安全性でいったらピカイチだ。

水は、ちょっと勘弁して欲しいくらいに溢れている。

食べるものは、もっぱら魚類。

俺と同じように流れに飲まれたら、魚といえども逃げられないんだろう。

打ち上げられ、びちびちと濡れた床で跳ねている。

熱帯魚以上に派手でカラフルな魚が多いので、最初は躊躇ったが、焼いて食べれば気にならない。

火？

乾かした流木二本と根気があればなんとかなるんだ、これが。

それから、この洞窟に唯一生えている木。

とても背の低い、今にも枯れそうな古木だが、桃に似た実がいくつが生っていた。

産毛のない、宝石のようなつややかさを持ち、みずみずしく甘い。

これが不思議桃で、一口食べれば元気百倍。

俺が初めて食べたのは、この桃だった。

衰弱しきっていたのが、桃をひとつ食ってからもう一眠りしたら、全回復だ。

どんなエリクサー、ハイポーションだとびっくりした。

凄すぎて、あだや疎かにはできない。

気楽に食べたなら、もったいないおぼけが出そうだ。

しかし、いざという時の心強い味方を得たのだと思い、何よりも重宝している。

普通の木の実や果実なんかも流れつく。

木の実で多かったのは、手のひらサイズのヒマワリの種のような実で、生で食べる椎の実みたいな味。

パンの実によく似た実もあった。

ごく稀にしか流れ着かなかったが、パンの実同様焼いて食べると美味かった。そして、俺の知っているパンの実とは違って、生で食っても美味かった。

生で食うとバナナ、焼いて食うとサツマイモっぽい食感だ。

食べた後の皮や、要らない流木などは、放っておくと水の流れに乗って姿を消した。

そんなこんなで、滝つぼにもう一度飛込む気になれないまま、俺はこの洞窟で暮らしている。

ずっとヒッキー気取りじゃいられないのも分かってはいるんだけどな。

どうしたら、外に出られるか。

壁を殴っただけで穴が開いたりしないだろうかと馬鹿なことを考えたりもしたが、もちろん殴った手が痛かったただけだ。

鍛えればなんとかなるのかもしれないが、よくよく考えてみると、洞窟が崩れて生き埋めになる可能性のほうが高いんじゃないだろうか。

それならば、と見上げたのは天井。

光が差しこむということは、外と繋がっている。

しかし、先細りになった天井は随分と遠く、それなりに手がかり足がかりがありそうな岩の壁も途中までしか上れなかった。

第参回 猿、洞に暮らす（後書き）

悪魔の実を食べていない＝海でおぼれるデメリットがない、というのを考えていたはずなんです。

つまりは能力者よりも強くなるはずだったのに、いつの間にか能力者以上の弱点に。

……どうしてこうなった。

それでは、次回の講釈にて。

第四回 金斗雲の術

そうして。

新芽が芽吹き花が咲き、実が生って落葉する。

日本の四季とは違えど一年で季節が廻るなら、春は5回来た。

ジャングルではもっぱら猿だ。

この島、生き物がやたらとでかいんだよ。

獣型でいても何倍もの体格差があるのに、人型でいた日には確実にぶちだぜぶち。

小さくなりたい時 猛獣に襲われて逃げる時なんかには人型になったけれど、今ではほとんどそんなことはない。

5年経って、島にいるどんな猛獣にも負けないほど強くはなったからな。

……が、成長はしていない。

なんでだ！

鍛えれば鍛える程強くなる実感はあるのに、成長した実感は全くというほどない。

いやいやいやいや、成長はした。

少しだけだが、ほんの僅かかもしれないが、成長はしているんだ、そのはずだ。……たぶん。

肉体年齢に実年齢がやっとな追いついたんだ、きつと。これからみる成長するはずだ、ぜったい。

あ？

そんなことはどうでもいいから、どうやって洞窟から脱出したの
かって？

どうでもよくな……まあ、いいや。

空を飛んだのさ。

頭がおかしくなったんじゃないからな、言うておくけど。

俺は猿だ。

人型でいても、猿は猿だ。

とっかかりの少ない天井も上れると思ったんだが、いざ上ってみると斜めになったり出っ張ってたりして、駄目だった。

ネズミ返しに猿も負けた。

落ちる！と思った時には落ちていた。

洞窟の床に叩きつけられたら、ただでは済まない。

やばいやばいやばい。

俺は無様にも醜く空中でもがいて、何とか着地できるように体勢を整えようとした。

ふいに。

足がふわりと浮いた。

余計にバランスを崩した。

おかげで頭から落ちた。

しこたま打った頭を抱えて七転八倒してたら、更に全身傷だらけになった。

貴重な不思議桃をまたひとつ消費した。

散々だ。

しかし、なんだろう？

滝壺に落ちた時。

パニックに陥っていたからしつかりとは覚えていないけれど、あの時も同じような浮遊感があったと思う。

試しにその場で足踏みをした。

足の裏には、何の抵抗も感じない。

んー？

その場で跳ねたり、宙返りをしてみたり。

ただそれだけではあの浮遊感は生まれにくいようだ。

いろいろ試行錯誤をしてみて、意識の問題じゃないかと気がついた。

必要なのはイメージだ。

跳ぼうとするのではなく、飛ぼうとしなければならぬらしい。

足の裏に気持ちを集中させると、空気の固まりのような、足場のようなものを感じるようになる。

まずはこの段階で、宙を上にと駆け上がることを覚えた。

体に、覚えこませた。

ひたすら練習したのさ。

広いと思った洞窟内の空間も、こうなってくると狭い。

色んなところにぶつかって、しかしおかげで細かい制御ができる

ようになった。

空気を踏み足場を強く意識することで、何も無い空中に立つこともできるようになった。

そのまま意識を集中させていると、足裏に霧のような空気の塊が発生する。

更にしばらくすると霧が雲のようにもっと密度の濃い塊になり、足場が目視できるようになった。

つまりこれって金斗雲かよと、やっとイメージがはっきりした。

イメージが固まれば更に使いやすくなるかと思えば、そうでもなかった。

金斗雲の術ともなれば、びゅんびゅんと空を飛べるはず！

と思っただが、なかなかこれが上手くいかない。

飛ばうとすると雲に乗った足だけが先に進んですっ転ぶ。

バランス取るのが難しくって一苦労。

サーフィンやスケボをやっておけばよかったのかなあと今更嘆いても仕方がないので、ひたすら練習。

練習あるのみでやっと飛べたとするだろ？

うまく飛べた！と喜んで、集中が途切れた途端、雲が霧散するんだこれがまた。

なにしろ、こうして俺は洞窟からは出られるようになったんだ。

天井には亀裂のような細長い穴が開いていた。

人型でもやつとな縦穴で、これでよく洞窟内に日の光が届いていたなと思ったが、水晶みたいな鉱物や水に反射して煌めいていたらしい。

洞窟から脱出すると、待っていたのはサバイバルの日々だった。

この島、やはり人間はいなかった。

住んでいるのはビックサイズで危険極まりない猛獣ばかりで、最初は逃げてばかりいた。

今は、勝つけどな。

「重要な動物性蛋白質だ。」

サバイバルだけじゃない。

広いところで、金斗雲の術にも磨きを掛けた。

島からの脱出も可能になった。

そう思って意気揚々と、海に向かったんだこれでも一応。

でも駄目だった。

山のとっぺんから見回しても島影一つ見えなくて、どちらの方角に向かえばいいのかも分からない、どれだけ海を飛び続ければいいのかも分からない、と考えた途端。

雲は霧散した。

精神力が足りないのだろう。

それともイメージが弱いのか。

多分、もっと強い精神を持ってすれば、どこまででも飛べるはず！

精神修行だと座禅を組んでみたりもしたが、海に落ちる自分の姿しか脳裏には浮かばず、余計飛ぶのが恐くなった。

無理無理無理。

うん、おれまだうさい。

成長を待とう。

第四回 金斗雲の術（後書き）

くるとトンボを切ると雲に乗れる金斗雲の術です。

ドラゴンボールの筋斗雲のようにアイテム化しようかなとも思いましたが、月歩みたいに使えらというのも面白いと思って、こつなりました。

字が当て字なのはスルーしてください。

それでは、次回の講釈にて。

第五回 初めての殺意と

15年経った。

カレンダーなんてないから、どんぶり勘定だけだな。

10年は越えてるけど、15年は越えてないんじゃないか、みたいな。

最初の5年くらいまではきちんと数えていた。でもその内、どうでもよくなった。

だって変化がない。

経った年月を指折り数えても虚しいくらい、俺自身に変化が乏しいんだ。

海は怖いままだし、体もほとんど大きくならない。

なんでだ。

人と成長速度が違うのか？

15年近くをかけて、3歳児がせいぜい6歳児になった程度。

変化が緩やか過ぎて、1年や2年では何が変わったのかすぐには気づかないようなのんびりさだ。

握ったら折れそうな腕の細さも変わらない。力をついたのに筋肉ついてないってどういう仕組みだよ？と自分の体なのに首を捻りたくなる。

しかし自身の体はともかく、約15年の時の流れの中で全く変化がなかったわけでもない。

まずは仙術な。

金斗雲の術が仙人に師事しなくても使えただろ。

つまりあれは、仙術が『孫悟空』のスペックとして織り込まれてるっていうことだと思っんだ。

だから他の術も使えるはずと考えて、色々試してみた。

最初に試したのは七十二般の変化の術。

既にゾオン系のメタモルフォーゼができるんだから、簡単だと思っただ。

しかし、そうは問屋が卸さなかった。

獣化のように本能に近い部分でできるものでもないらしい。

本能ではなく知性が必要なら、イメージが大切になってくる。

たとえば、赤い弓兵の投影のような。

十分な理解の元、正確にイメージしなければならぬ。

……と、思い込んでしまったのが一番の敗因なんだ、きっと。

当たり前のことだが、普通の人間だった俺に変身の経験値はない。

ひょいと虻に変化する？

どうにも想像がつかないだろ。

体積どこに消えるんだよ俺の内臓どこよと考えてしまっ、やっ
てみる気も起きないんだこれが。

しかし、身外身の術は使えるようになった。

身外身の術つてのは、孫悟空がぶちりと抜いた毛に息を吹きかけると、猿がわらわらと出てくるあれだ。

あれはあれで理屈なんて関係なくそんなものと思っっているからか、息を吹きかけるだけで簡単に変化した。

……最初はなんだか思い出すのもグロテスクな物体になっちゃったけどな。

ローラースケートで立ち回りしていた舞台じゃ、その役者の顔のお面を被った奴らが出てきていたよなとイメージしたら、紙のお面をした石人形みたいなのができたり。

つまり、式神とかゴーレムか！といろんな形のものを面白がって作ってみたが、最終的には50センチばかりの金色のこぎるで落ち着いた。

え、小さい？

いいんだよ、癒されるから。

それに、自分よりでかいサイズの猿を作ったら、無性に腹が立つんだ。

ちなみにこぎるたちだが、俺にできることしかできない。

つまり、パンの実を焼いたり火を熾したり釣りをしたりはできるが、醤油や味噌を作ったりはできない。

棒切れ持ってチャンバラごっこはするが、いきなり真空波を放つたりはしない。

弱点も俺と同じく水。

ばしゃりと全身が濡れるほどに水を被ると、元の毛に戻る。

でも、水に対する恐怖心は俺より少ないらしい。

不条理だ。

それからもうひとつ。

数年前、島に海賊が来た。

海の向こうに、船影を見つけた時には海の上を走りそうな勢いで嬉しかった。

実際には海の手前で、急ブレーキかけたけどな。

船は3隻。

そして、その全てにジョーロジャーがはためいていた。

海賊船。

しかしだからなんだ。

海賊なんて、この世界には掃いて捨てるほどいるはずで。

人間に会うことのできる喜びの前には、小さなことだった。

俺はわくわくしながら、船が島に近付いてくるのを待っていた。

けれど。

ガガガガン！

突如鳴り響く破壊音。

風に乗って聞こえてくる喧騒。

暗礁に乗り上げて、船が割れていく。

すげえ。映画みたいな迫力だ、と。

俺はバカみたいに口を開けて、船が沈んでいくのをただ見ていた。

逃げる人影が船の端からぽとぽと落ちていくのが分かってても、現実味を感じていなかった。

海に落ちた海賊たちは、他の船に拾われていた。

しかしそれでも、海賊たちは上陸を諦めない。

また一隻、岩礁を避けて島に接岸しようと接近してくる。

そして、海岸に立つ俺からも顔の判別がつくような距離になると、搭載の手漕ぎボートを降ろした。

いかにも海賊ルツクな男たちが5人ほど乗り込み、船首に立つ山高帽の男に指揮されて、オールを漕ぐ。

乱立する岩が生み出している海流の荒々しさには心もとない小船じゃないだろうかと思っていた矢先に、渦を巻く海流に捕らわれた。

バキバキと船の割れる音と、振り落とされた男の上げる悲鳴。恐怖に満ちた表情。

やばい!と思った。

この時やっと、俺は目の前の光景にリアルを感じたんだ。

溺れる人間の死を。

そこからは無我夢中だった。

助けなくてはならない、と思った。

助けることができると思った。

ジャングルにいる常で獣化していたけど、ただ必死に海を走った。

しかし。

「ば、ばけもんだ!」

そんな、悲鳴混じりの怒声を聞いたように思っ。

ドゥンッ!

それに続いた、音。

左の腕に焼けるような痛みが走る。

山高帽の海賊が、俺に銃口を向けていた。

撃たれた。

やっとそれを理解した。

人に殺意を向けられたのは、あれが初めてだった。

そして……。

人を殺したのもあれが初めてだった。

第五回 初めての殺意と（後書き）

身外身の術は、変化の術のひとつだと思い込んでいました。

それはともかく、R15のタグを見つけました。

今後の予防というか、まったくもって全然思いがけない方向に話がそれて、殺伐としてきたので。

それでは、次回の講釈にて。

第六回 戦闘

空を飛んできた勢いのまま墜落する羽目になった俺は、ダダンツと板を踏み抜きそうな騒音立てて、マスケツト銃を構えていた男の前に降り立った。

「ひいつ！く、くるなあ！」

近すぎる距離にか、目の前に立つ猿の大きさにか、悲鳴混じりの声を発しながらも銃口が追ってくる。

撃たせるかよ！

俺はブンツと左腕で銃身を薙ぎ払った。

グギリと。銃身だけでなく、銃持つ腕までもが変な方向に曲がった上、男は船の外まで吹っ飛んでいく。

思わず、見送った。

おいおい。

島の猛獣たちと比べると、脆いな人間。

「このやるつ！」

背後から剣を振り被ってきた男に飛び蹴りを食らわし、俺は踏みつけた顔を足場にして大きく跳んだ。

直後、渦に飲まれた小船が砕けていく。

望んだ結果ではない。

助けようと思ったんだ。

助けたかったんだ。

ちくしょう。

海賊船まで空を走り、帆にぶつかるようにして、メインマストの下の甲板に落ちる。

俺が立ち上がるよりも早く、無数の刃の雨が降ってきた。

海賊たちに囲まれて、斬られたのだ。

俺は両腕で頭を庇い、蹲ることしかできなかった。

しかし。

ギン！

ガギンッ！

……痛てえ。

俺は骨まで響く痛みに耐えながら立ち上がった。

「き、効かねえ！」

「こいつ斬れねえぞ」

動揺した海賊たちが後ずさる。

武神たちの宝剣でも斬れなかった孫悟空の身体の強靱ぶりを舐めんじゃねえ。

といつても、今まで刀を相手にしたことはないんだから、内心どきどきだったけどな。

次の剣げきは降らない。

立ち上がることでできた俺は当たるを幸い、ただ我武者羅に両腕を振り回し、怯んで腰の引けた海賊たちを薙ぎ払った。

「うわわわっ！」

幾重にも悲鳴が重なる。

吹き飛ばされたやつらが落としたカッタラスを両腕に持ち、威嚇し、振るう。

海賊たちは更に間合いを取り、甲板の真ん中にぼっかりと、俺を中心点とした穴が空いた。

つかの間の硬直状態が生まれる。

ドン！

頬に熱が走った。

全ての視線がその音の先に集中した。

つばの広い羽つき帽と裏刺繍が派手なマントの男が、俺たちを見下ろす船尾楼甲板に立っていた。

細い煙をたなびかせたマスコット銃を腰のガンホルダーに戻す。

腰に巻かれた幅太の革ベルトには他にも何丁かの銃が挟みこまれている。

男はマントをばさりと跳ね上げると、腰の後ろからばかでかいラッパ銃を取り出した。

両手に構えて、にたりと笑う。

「キャプテン」

誰かの呟く声が、聞こえた。

キャプテンね。

男は声を張り上げる。

「覇気を使え！こいつア能力者に違いねえ！覇気をこめりゃあ効くぞ！」

ハズレ。

俺は能力者じゃない。

そして孫悟空には、炉で焼いても目が赤くなっただけだったとか、八つ裂きにしようとしても斬れなかったという逸話はあるって、銃で撃たれても平気だったという逸話はない。

だから、覇気が効いたのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。

鉄砲玉だから効いたのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。

教えてやらないけどな。

海賊頭の声に従い、俺を取り囲む輪が更にざっと広がった。

逆に数人の男がそれぞれの得物を手にずいと前に出てくる。

覇気使いか。

だが。

俺は、彼らをまるつきり無視して、海賊頭に向かって跳んだ。

ガガガン！

それに反応して、ラッパ銃が火を吹く。

いびつな鉄片が無数に飛んできた。

空を蹴って、俺は跳躍を繰り返す。

俺が海を飛んできたのは見ていたのだろう。

本来なら有り得ない空中の方向転換にも慌てることなく、更に新しいラッパ銃を抜いて、乱射してくる。

どんながらくたを詰めても撃てるという散弾銃。

仲間に優しくない銃だ。

いや、仲間がいても平気でラッパ銃を使っただから、優しくないのは彼らのキャプテンか。

俺がことごとくを避けるので、甲板に鉄の雨が降り注ぐことになる。

「ギャー！」

「うわわわっ！」

甲板には流れ弾に当たった海賊たちの悲鳴が満ちた。

「よくもやってくれたな」

頭が呻くように、歯軋りの隙間から声を絞り出す。

いや、やったのあんただから。

俺は、海賊頭に肉迫すると、両手に持ったカッタラスを振るった。

海賊頭は迫るカッタラスを避けて次の銃を抜こうとしたが、遅い。

凶刃は、首と胴を過たず捉えた。

血飛沫が、舞う。

「キャ、キャプテンがやられたぞ」

「逃げる！」

残っていた海賊たちは海に飛び込んで、海賊船の最後の一隻に乗り込み、逃げていった。

俺はひとりで真っ赤な甲板に立ち尽くしていた。

操り手のいなくなった船は波に弄ばれ、岩々にぶつかり砕け、座礁した。

俺は島に帰ると、滝つぼに飛び込み、最初の時のように桃の木の根元で眠った。

そういえば、あの時は海も滝も怖いと感じなかったな。

何を感じるよりも何よりも、ただ、全身を濡らすべったりとした血が不愉快だった。

きつと色んなものが麻痺していたんだろう。

その一部分は多分今も麻痺したままだ。

第六回 戦闘（後書き）

戦闘シーンは難しいです。

前回と今回の話は、元々の予定では海賊が来たこともあったと三行ほどの回想で終わり、原作キャラ登場となるはずでした。どうしてこうなったのか。

今回はやっと原作キャラ登場。そして苦手なくせして再び戦闘シーンとなる予定です。

それでは、次回の講釈にて。

第七回 戦士、来たる

数年経った今では、座礁した海賊船の残骸も荒波に砕かれて海の底へと沈み、僅かに竜骨の一部が波間から顔を出しているだけだ。

暫くの間は島に色々なものが流れついた。

どうして海の底に沈まなかったのか不思議なくらいにずしりと重い宝箱とか、酒瓶が詰まった木箱とか。

香辛料の類は嬉しかった。

海の上では湿気が怖いのだろう。しっかり防水してあるものが多かったため、海を流れてきてもあまり駄目になっていなかった。

めぼしいものは回収した。

こぞるたちが。

俺としては、暫く海を見るのも嫌だったんだよ。

反面、小さいこざるたちが回収物を抱えてちまちま歩く姿には癒された。

だけど、服を回収してきたのかと思っただら中身つきだった時には、勘弁してくれと悲鳴を上げたくなった。

これが案外多かったんだ。

そのままにしておくのもどうかと思って、まとめて茶毘に付した。

羅生門を思い出しながら。

流石に身ぐるみ剥いで髪を抜くなんてことはしないさ。

服は他にも（中身つきではないものが）流れついていたから、わざわざ水死体が着ているものをいただく必要はなかったし。

ま、貴金属貴重品の類は回収したけどな。

何はともあれ、おかげさまで俺の暮らしは一気に文明開化を迎えた。

食器も使っし、ズボンも穿いているんだぜ。

ズボンは黒。人型になった時にも引き摺らないようにと自分で長さを調整した裾はぼろぼろだが、赤のサッシュを巻いてお洒落に決

めている。

誰もいないんだから、ズボンを穿く必要はないって？

猿と人間の違いはパンツだって、どっかの学者さんも言っていただろ。

そういうものなのさ。

回収物のひとつである釣り竿背負って磯釣りに行っていたこざるが、「浜に人間がいる」と報告してきた。

人間ねえ。

流石に前回のよう^に喜び勇んで駆け出す気にはならない。

しかしもちろん、全然気にならないと言えば嘘になる。

結局俺は、自前の武器である昆を片手に浜へと向かい、木陰からこっそりと様子を伺うことにした。

波しぶき高い岩場に男がひとり立っていた。

沖に船は見えない。

他に人影もない。

けれど、島まで泳いできたわけでもないようで、男の服に濡れた様子があるわけでもない。

どうやってきたんだよ。

年の頃は二十代後半だろうか。いや、もっと若いのかも。

背は高い。

腰に幅太の剣を下げている。

全体的に黒い。

胸元開けて着ているシャツやズボンに、首の後ろでひとまとめにした癖のある髪。剣を下げるベルトも、柄も鞘も。

何もかもが黒くて迫力がある。

俺は少し離れた木の枝の上、生い茂る葉に隠れて様子を伺っていたが、黒服の剣士はそのことに気がついていたらしい。

周りを睥睨していた目を、ひたりと当てられた。

こわっ。

眼光の鋭さに驚いて、俺は無意識に身を引いた。

がさりと枝が鳴る。

それを合図にしたかのように、剣士は地を蹴った。

腰に下げるには大振りやしないかと思う大剣を片手でやすやすと抜き、振るった。

その剣圧だけで枝葉が舞い、俺は隣の木の枝に飛び移り、幹を駆け上がるようにして上へ上へと逃げた。

どっという挨拶だよ。

いきなり攻撃するんじゃないか、ねえ。

どいつもこいつも好戦的すぎないか、まったく。

そんな文句を言う暇もなく、剣士は三段跳びの要領で木々の間を飛び上がり、猿よりも音を立てずに追ってくる。

ぶんと唸りをあげて迫る大剣を、とんぼをかえして避けた。

通り過ぎた剣は慣性の法則を無視して、そのままの勢いを保って戻ってくる。

しっぽを枝に巻きつけて、もう一度宙をぐるんと舞った。

これで三度。

剣戟を避けることができた。

多いとみるか少ないとみるか。

剣速は、以前海賊に撃たれた時の鉛玉よりも速く感じたから、あれを避けた俺ってすげえ、と自分では思うけどな。

しかし、四度目は無理だった。

とつさに手に持っていた昆を体の前に出して防御するが、元々が頑丈そうな木を手折って枝を払っただけの昆だ。

剣士相手には何の役にも立たず、簡単に両断された。

昆を越えて、刃が俺の胸を袈裟切りにしようと迫る。

ギン！

肉を断つたにしては有り得ない音が響いた。

よかった、弾いた。

しかし衝撃は重かった。

猛烈に痛い。

俺は吹き飛ばされて無様に転がり、土にまみれた。

「ほっ」

剣士はその手応えに、何を感じたのか。

感嘆の声のような息をもらすと、剣を鞘に戻し腰を落とした。

抜刀の構えをとる。

静まる空気と伝わる気迫。

「ふっ」

息を吐く音は聞こえたが、抜き手は見えなかった。

見えたとしたら、そこに込められた殺意。

それともこれが、覇気か。

俺は身を後ろに一歩引き、紙一重で剣を避けた。

いや、違う。避けたというよりも、圧せられて下がったのだ。

しかも避けたはずなのに、剣圧だけで右肩に刀傷を負った。

やばいやばいやばい。

俺は必死に、近くの木の幹を駆け上がって逃げた。

これは死ぬ。マジで死ぬ。

距離を置き、木の上と下とで睨み合う。

眼力だけで、固形化した殺気を感じる。

気の弱いやつなら気絶しそうだ。

俺もちょっとやばい。

何て鋭い目。

人っていうよりも、獲物を狙う猛禽類の鋭さ。

……て、あれ？

原作にいたよな、そういう目の剣豪。

「ダ、ギキツ」

ああ！しゃべれない。

出てきた声は全部濁音みたいに響いて、言葉になっていない。

そういうば猿だったな、俺。

しかしまあ、話そうとした意思は通じたらしい。

剣士は怪訝そうに眉を歪め、剣先をわずかばかり下げた。

「ム……？人の言葉を解すのか」

うん。

しゃべることまでできるわ。

生まれてから一度も誰かと会話したことないけどな。

なんにしる獣型では会話は無理だと分かったので、人獣型になってみる。

剣士が目を見張るのが分かった。

「オ、マエ……だ、だだ、ダレ、だ。ナニシに、キ、ぎ……キタ」

お前は誰だ。この島に何をしにきた。

うーん、言えていない。

「猿ではなく、能力者か！」

違っよ、猿だよ。

岩から生まれた猿。

斉天大聖孫悟空さまだ。

驚きの声を上げた剣士は、それでも俺の問いかけに答えてくれた。

「我が名はミホーク。ジュラキユール・ミホーク」

やっぱり、ミホーク！

若い、若いよミホーク！

髭はもう生えているけど、まだ貫禄より若さが先にたつ。

ああ、驚いている場合じゃなかった。

名乗りを受けたならば返さなくては。

俺はもっとしゃべりやすくなるかと、人型になってみた。

「ゴ、クウ」

それでも、人型で初めて出す声は覚束ない。

「ソン、ゴクウ」

「……こんな子供だとは」

ミホークの声は、驚きに満ちていた。

第七回 戦士、来たる（後書き）

というわけで、若き日のミホーク登場です。

ひげはまだ生えそろえたばかり。ここ重要（嘘です）

それでは、次回の講釈にて。

第八回 仙桃の島の伝説

海賊の時代よりもずっとずっと昔の話。

ログボースも存在せず、造船術も航海術も遥かに頼りなく覚束なかつた頃。

人類未踏の島が数多く存在し、多くの冒険者が居住可能な新天地、そして未知なる資源を求めて海に乗り出した開拓時代。

そんな時代を冒険した男の手記に、こうある。

長い航海の末の海の果て。

海底火山の噴火により深い海の底から隆起して生まれた島があった。

険しい山々が雲を衝く島。その周りを取り囲んでいる、更に鋭い牙のような岩。

それらの岩礁によって激しい海流が生まれ、船を木の葉のように持て遊ぶ荒波が常に渦巻いていた。

その島とさほど離れていない海域で男は突然の嵐に会い、遭難した。

何日も荒れる天気 to 翻弄され、舳先がどちらを向いているかも分からなくなった。

帆をなくし仲間をなくし、水も食料もなくし。

しかしどんな奇跡か、男の船は無事にその島に流れついたのだ。

島はまだ若く、溶岩が冷えて固まった地肌がごつごつと剥き出しだった。

岩肌にならずかばかりに生えた苔をがりがり削って飢えをしのぎ、その苔につく朝露で渴きをしのいだ。

そして男は、とうとう辿りついた。

桃源郷に。

巨人が剣で切り落としたような鋭い山肌の間、激しく吹く風から逃れるような窪地に……いや、険しい大地と厳しい風に守られているような窪地に、桃の木が群生していた。

正しくは桃ではなかったのだらうと、男はその手記にて語る。

溶岩石にへばりつく低木は、しかし年老いた賢者の徳を思わせた。

いまだ固い蕾と薄い色合いの花、そして艶やかな果実が同じ枝に違和感なく存在していた。

その実は実際の桃よりも鮮やかな桃色で、宝石のような滑らかさと艶やかしさをもって日の光を弾いていた。

見たこともない種類だったが、飢えて死にかけた人間にそれがなんの障害にならうか。

それが毒であろうとなかろうと、食べなければ死ぬ。

極限状態にいた男にはそんなことを考えるゆとりもなかった。

ただ、食った。

そして一気に気が弛んだのか、気絶するように眠った。

目覚めた時、男は自分の体の軽さに驚いた。

体力も気力も回復していた。

そして、男はその窪地の両岩壁に自生していた巨大なシダや蔓草で帆を作り、再び海へと船を出した。

壊れる寸前のような傷だらけの船がそれでも渦に吞まれることがなかったのは、歴史に名を残した男がその名声に見合う卓越した腕を持っていたからなのか、それともそれだけ幸運の女神に愛されていたからなのか。

男はあの桃源郷から、桃の実のついた枝を一本だけ手折り持ち帰っていた。

その枝が余所の地で根付くことはなかったが、しかし不思議なことに桃の実は何年もの間、枝にあり続けた。

徐々にしなびれこそしたが、枯れも腐りもしなかった。

彼の子供の命を救うその日まで。

男は『命の桃』と手記に書き残した。

そしてまた、それは食せぬ桃であると。

ひとつ食せば、傷も病も癒し。

ふたつ食せば、老いを退け。

しかし、みつつ食せば命を失う。

そう書き残した手記に、肝心の島の位置は書き記されてはいなかった。

誰にも語らなかつた。

たとえ聞かれても、やみくもに海を渡ったから場所は分からないと答えた。

そして仙桃の島の伝説が残された。

「その島があれば面白い」

と、酒の杯を傾けながらミホークが言った。

え、なんで酒を飲んでいるのだった？

この世界の海賊って「倒すまで戦うか、それとも宴会か」が常識じゃないの？

第八回 仙桃の島の伝説（後書き）

閑話休題。というか、蛇足？

……いやマジで、次回UPしたら、これいらんと言われそうかも。

それでは、次回の講釈にて。

第九回 桃と剣士

というわけで、現在酒盛り進行中である。

酒は、俺がストックしていたものと、こぎるたちが作っただいわる猿酒と呼ばれるもの。それから、ミホークが自分の船から下ろしてきたもの。

随分ときつい酒だ。

更にミホークは酒を持ってくるついでにと、ウミヘビに似た（しかし随分と巨大な）海王類を仕留めてきた。

流石はミホーク。

海王類を仕留めたことよりもそのサイズを肩に担いできたことに

びっくりだ。

いやホント、人間として間違っているよ、あの視覚効果。

ので、俺が狩ったマンモスみたいな獣の肉も合わせてこざるたちが調理した。

串に差して火で焼いただけの単純なものだけど、ブラックペッパーが素材の味を引き締めて美味いんだぜ。

こつちに来てから、新鮮な肉がどれほど美味いかを初めて知った。

新鮮な肉、そして出来上がったばかりの熱々の料理。

もうコンビニ弁当なんて食べられないだろうな。

ちなみに俺は今、人獣型になっている。

人型だと見た目6歳、いやもつと小さく見えているのか、ミホークが酒を飲ませてくれなかったんだ。

俺もいままで酒は大猿の姿でしか飲んだことなかったから、人型で飲むよりも人獣型で飲むほうが不安がないのは確かなんだけど、ただ人型じゃないと喋りにくいんだこれが。

それに、この世界には「お酒は二十歳になってから」ってのはな

かつたはずだよな。

そうじゃなきゃ麦わらの奴らは皆子供ビールってことになる。

ナミがバロツク・ワークスとやっていた飲み比べだって子供ビールで、ゾロが甲板で抱えている酒瓶だって葡萄ジュースとか健康酢？

ないだろそれは。

酒を飲みながらミホークが語るのは、仙桃の島の伝説。

そこはグランドラインの端、カームベルトと交わる荒れ狂う海にあると言われているが、伝説はあくまで伝説でしかなかった。

空島のように、確かにあるが辿り着けない夢物語ではない。

ただ、古の英雄のひとつの冒険談として語られ、子供が憧れるだけだ。

今は昔に滅んだ大国の皇帝が不老を求めてこの島を探したと語り継がれてはいるけれど、それもまた伝説。

しかしその伝説も、とある海賊が手に入れた一枚の海図により、

変わった。

海賊が襲った町の資産家が持っていた古文書（好事家には高値で売れる）に、挟まっていた古ぼけた羊皮紙。

書かれていたのは、一本の航路。終点にある島の名前は記されていない。

すわ宝の地図か、と。

色めき立った海賊は、持ち船すべて連ねてその島を目指した。

見つけたのは、伝説そのままの島。

手に入るものは、不老。そして巨万の富。

しかし、海賊がそれを手にすることはなかった。

伝説通りの荒波と渦潮を生み出す岩礁。

訪れる結末は、近年グランドラインでも名が売れてきていた海賊団の壊滅。

そしてその生き残りによって新たな伝説が生まれる。

その島には、化け物猿の守り神がいる、と。

「まことであれば面白いと思ったのだ」

串から肉をかじりとりながら、終わりに近づいてきたミホークの話に耳を傾ける。

「新鋭の海賊を倒したほどの化け物がいるのなら、ちょうどよい暇潰しになるっ」

それはただのひまつぶし。

ただの、……興味本位？

確かに鷹の目のミホークなら「暇潰し」でどんなことでも仕出すイメージはある。

けれど俺はミホークの言葉に違和感を感じる。

本当にそれだけなのか。

それだけではなく、つまりミホークは必要に迫られて桃を探しに来たのではないか？

「ミホ、ク、大切な人……が、ビヨウキな、のか」

だから、俺は思うままを口にした。

「いや」

ミホークは、眉を寄せて口を噤んだ。

後で知ったことだが、「大切な人」と言われたことに引っ掛かったらしい。

「……ただ、傷から毒が入ったと聞いた」

強きものが失われるのは惜しい、と。ミホークはしばらくの間をおいてから言葉を紡いだ。

ふーん、と俺は焚き火に照らされるミホークの顔を見上げる。

俺は食べ終わった串を焚き火に放り込むと、立ち上がった。

「ミホーク。くる」

ミホークも杯を干すと、脇に置いていた剣を持ち立ち上がった。

「ミホーク、この向こう。潜って」

俺はミホークを、あの滝へと案内した。

ちなみにここまでの道のりはジャングルの枝を渡って先導してきたが、今は人型になってミホークの肩に掴まっている。

うん、まだ怖いんだ。

というかこの滝、俺にはトラウマものなんだ。

人型であれば何とか滝の前に立っていられるけど、そこまで。

それ以上は無理。

だからミホーク。

何も聞き返さずに即行動っていうのは、俺の言葉を疑ってない証拠ってどうか、信じてくれて嬉しいけれども。

頼むから、いきなり俺ごと滝つぼに飛び込むのは止めてくれ。

第九回 桃と剣士（後書き）

全く進んでいません。

こんなはずじゃなかったことばかりです。

こんなこともあるのかと、と言えるようになりたいです。

うん、無理だ。

それでは、次回の講釈にて。

第拾回 桃と猿と伝説の終わり

大パニックになって暴れた俺は、もう少しでミHOOKを溺れ死にさせるところだった。

らしい。

覚えてねえよ。怖かったんだから。

びしょ濡れになって、もういやだと洞窟の床に沈んでいる俺の横で、まったく消耗した様子なく立つミHOOKが「ほう」と感嘆の声を発した。

洞窟にあった美しく澄んだ泉。そこには今、某海賊映画のワンシーンを彷彿とさせるがごとくに、煌めく宝の数々が沈められている。

やったのは俺だけど。

以前。沈んだ海賊船から、やたら金貨の木箱や宝石箱が流れ着いたからな。

けれどそれだけじゃなくて、こざるたちが持ち帰った宝箱にはもつと年季が入った、フジツボやなんやらの張りついたものも多かった。

きつとあの船の他にも、昔沖合いで難破した船の貨物とか、流れ着いたまま手付かずで残っていた漂流物がたくさんあったんだろう。

そういうものを全部この洞窟に運んだ。

そして、このやたらとでかい水溜まりを埋めてやれとばかりに、全部箱から出して放り込んだ。

無人島でお宝なんて、食えない使えないで無用の産物よ？

空いた箱のほうがよっぽど生活の役に立ったさマジで。

金貨をぼんぼん放り込む時にはちよつとだけ「水があると寶錢を投げ入れなくなる日本人」てのが脳裏を掠めたけれど。

ちなみにここにお宝を運んだ時には、滝つぼを潜ったりなんかしなかった。もちろん。

狭いけど、天井の隙間からちまちまと運んだんだ。

今回だってミホークを滝に誘導した後で俺は金斗雲を使い、洞窟の上から中に入ってくるつもりだったのに。

どつしてこつなつた。

「ミホーク、こつち」

気を取り直した俺はミホークの肩に乗り、髪をくいくいと引つ張ることで、洞窟の奥へと誘導していく。

そこにあるのは、葉もつかない一本の老木。

大きくなりきれなかった実がひとつ、木守りとして枝の先でしなびているだけだ。

多分、もう実はない。

ミホークの語った伝説のように、葉も花も実も同じ枝につくような賑やかさは、俺が初めてこの木を見つけた時から今までに一度も見ただことはなかった。

それに、この洞窟以外の場所で、桃の木を見たこともない。

……ここがその伝説の溪谷だったとしたら、どうだろう。

つまり、この洞窟は俺が思っていたような水の浸食でできたものではなく、火山噴火や崖崩れで埋もれたものだとしたら。

この木が伝説の桃源郷にあった桃の木の、最後の一本ということになるのかもしれない。

「そうか。命の実はないか」

ミホークが呟いた言葉は、小さかったのに重かった。

俺はミホークの肩から飛び降りると、彼を見上げた。

ミホークの胸に去来するものは何か。

俺はミホークに誤解を与えたことに気付き、慌てて頭を振った。

「違う、ミホーク。こっち」

俺はミホークのズボンの裾を、くいくいと引いた。

俺が誘導したその先は、洞窟の壁が一ヶ所崩れて斜面になってい
る。

実は金斗雲の練習をしていた頃、加速制御に失敗して激突した箇

所だ。

頭から突っ込んで壁が崩壊し、そして生き埋めの恐怖を味わった。崩れた壁を見る度に鬱になるのでどうかしよう、とりあえず食べた桃の種を埋めて水を撒いた。

こんな洞窟だ。

撒いただけでどうにかなるものではないともちろん思ったが、だからといって残念なことに、俺は緑の手も知識も持っていない。

分かることといえば、水と光、そして後は土に栄養が必要ということくらい。

だから、岩清水が途絶えないように、しかし水没はしないようにと（こざるたちを使って）水路を掘った。

そして採光。

反射してきらめく水晶や金貨を貼って、わずかな光が届くようにした。

後は昔どこかで聞きかじった曖昧な知識を元に、ジャングルから腐葉土を持ち込んだり、魚のあらや砕いた貝殻、焚き火の灰なんかを撒いてみたり。……それがまとめて腐ってひどいことになったり。

そうして今、地下温室のようになったその場所には、若木が数本育っている。

三年くらいかかって花が咲き、今年やっと一粒だけ実がなった。

ん？

まさか俺って桃の木と成長速度同じ？

いやいやまさか。

……。

ええ！？

俺が成長しないのって、まさか桃のせいじゃないよな。

第壹拾回 桃と猿と伝説の終わり（後書き）

桃栗3年柿8年。

石猿も仙桃も3年 10年計算に見せかけて、閻魔帳に書かれていた寿命が342歳な孫悟空スペック保持だからというオチでよろしく。

それでは、次回の講釈にて。

第拾巻 回 猿、海に出る

どんな仕組みか、小さな船が荒波を掻き分けて進む。

大海を渡るには危うい小船。

その船の真ん中に、剣士がひとり毅然と立つ。

え？俺がどうしたかって？

ミホークの足元で小さく丸まって、ぶるぶると震えているよ今現在。

「うみこわいうみこわいうみこわい」

その後、俺たちは桃の実の生る枝を手折って、外に出た。

もちろん俺が洞窟から出る時は、金斗雲を使った。

またミホークが俺の首根っこをひょいと掴んで滝つぼに飛び込んだりしたら、堪らない。

天井近くまで上がると、「先に出てる」と言い捨てて、とっと逃げ出した感じだ。

そして滝の前で再び合流すると、俺はミホークにひとつ頼みごとをした。

「ミホーク、おねがい」

「よいのか」

「いいんだ」

海図が存在した。

それが発覚してわずか数年で、あの海賊たちが、そしてミホークがこの島に辿り着いてしまった。

つまりはもう、伝説が伝説ではなくなってしまうたということ。

これからも海賊が現れる可能性がとても高くなったといふこと。

いつかきつとこの洞窟の仙桃にすら辿り着く者がいるといふこと。

だから、いいんだ。

悪用されるよりは、ずっといい。

ミホークが助走もなく跳躍した。

そして、日の光に煌めく一閃。

それだけで滝のてっぺんにある張り出した岸壁部分が、すばんと切り落とされた。

ゴゴゴッ！

轟音立てて滝つぼに落ち、洞窟の口を塞いだ巨岩。

凄まじい水煙。

その衝撃に一瞬滝の流れすら止まったが、直ぐに大量の水が流れ落ちてくる。

おいおい。

あまりにもあっけなく簡単に岸壁を切り落としたミホークの剣技に、俺は馬鹿みたいにあんぐりと口を開けていた。

できると思っただからこそ頼んだけど、それでも凄すぎる。

包丁で大根輪切りにするのは訳が違っただからと言いたい。

でも。

「ミホーク、ありがとう」

俺はミホークに礼を言った。

ミホークはそれにどうと答えるでもなく、別のことを聞いてきた。

「おぬしはこれから、この島にいるのか」

うーん、と俺は首を傾げた。

仙桃は守りたい。

今回の環境の変化で何が起こるか分からないし。

しかし、ここに残ったら。

今までの島での生活を思い返してみる。

猛獣との戦闘の他に海賊との戦闘が追加されるくらいで、後はまた変わらない日々を過ごすことになるんだろう。

その内マジで野生化するかもしれん。

「共に来るか」

「……いく」

桃の世話はござるたちに任せよう。

というわけで、海に出たんだが。

「うみこわい　うみこわい　うみこわい」

俺はこうしてブルッているわけである。

ちなみに今は人型だ。

これが一番体面積が少ない。

少しでも海から遠のこうと必死なんだ。

こんなことなら島を出なければよかった。

ああ、でも今でなければ、俺は海に出ることなんてきつとできな
かった。

忘れていた、今でなければ。

うん、そう。

忘れていたんだ。俺の本能が海を怖がることもミホークの船が小
さいことも。

海はなー。遠目に眺める分には風景の一部と捉えるのか怖くはな
いし、前の人生では海で遠泳するの好きだったしな。それでもつて、
ここんところ（あの海賊来訪以来だ）海に近づいてなかった分、すっ
かり念頭になかった。

問題なのはミホークの船だ。

ていうかさ。ミホークの船なんだけど、聞いてくれよ。

原作にあった厨二病全開の十字架マストを背負った棺おけにソファー的なあれではなく、もっと普通に公園の池に浮いていそうなボートを少し大きくした程度の船に、生成りの帆が一枚あるだけだった。

なにさそれ。反則だろ。

つむじ風にもてあそばされる木の葉のように、上下左右に大きく揺れる小船。

今にも転覆しそうな勢いで大波が襲いかかり、ざばざばと海水に濡れる。

一緒に船に乗り込んだこざるたち（半分は島に置いてきたが、半分は連れてきた）も、最初は一緒に船底で震えていたが、海水被つてことごとく元の毛に戻った。そして波に浚われていった。

塩辛いのが船の中でも溺死しそうな浸水のせいなのか、流したつもりもない涙のせいなのかも分からなくなった。

なんでミホークは平気な顔でぶれることなく立っていられるんだ？

信じられないふざけるな。

俺を島に帰してくれー！！

第拾壹回 猿、海に出る（後書き）

自分の中でできてしまったイメージというものは根強いもので。

ミホークの一人称は『おれ』二人称『ぬし』だったなと思いつつも、でも『我』と書いて『オレ』とルビをふりたい今日この頃。

それでは、次回の講釈にて。

第拾貳回 海軍と猿

「ひとつ磨いて船のためくええ。ふたつ磨いて船のため。命あずけたこの船が、おいらのカワイイ恋人さアああ」

ジャツジャカ、ザカザカと。

調子外れの即興歌のようでもあり、しかしはるか昔から歌い継がれてきた伝統歌のようでもある船唄。その拍子を取るかのごとくに、椰子で甲板を磨く音が幾重にも重なって響く。

甲板での原始的な音楽を、ピーツ！と甲高い笛の音が切り裂いた。

お？

顔を上げた俺は「おわりかー？」と立ち上がって、広い甲板を見渡した。

クルーたちは皆作業を終えて三々五々片付けに動いているが、今回初めて参加する俺には勝手が分からない。

「おーい、ゴクウ。おまえは椰子割り集めてくれ」

きよろきよろしている俺に声が掛かった。

「あいあいさー」

微妙に間違っている気がする敬礼をしてから、近くにある木のバケツを抱えて、甲板の端のそこかしこに転がる椰子を拾い集め始めた。

あの後。

渦潮の海域を脱出した後、ミホークが軍艦を探してくれた。

うん、多分あれは偶然出会ったんじゃないかと、船底で丸くなってブルっている俺を見かねてわざわざ探してくれたんだと思う。

なんの計器もついていないのに、どうやって見つけてどうやって方向転換したのかは全くの謎だけどな。

遠洋航海が基本の軍艦はでかった。

縁に6つも括り付けられた端艇ひとつとってみても、ミホークの船よりでかいくらいだ。

だから、船の上だけど海は遠い。

船の縁に近付かなければ怖くないと、俺は暢気に甲板を歩くことができる。

ちなみにミホークは譲り渡されたキャプテンルームで、当たり前顔をしてくつろいでいる。

気障つたらしくぎやまんグラスでワインなんか飲んでるんだぜ。

似合っているけどな。

俺はミホークみたいに悠々とお大臣さましてるってのは、無理。

身体を動かしていないとダメなんだ。

貧乏性？

そんな事実、俺の耳には聞こえないよ。

だからタワシ代わりの椰子の実を手に持って、海軍の水兵さんたちと一緒に甲板磨きに精を出していたというわけだ。

水兵さんたちとは、随分と仲良くなった。

最初は不審な目で見られたぜ。

なにせあの鷹の目のミホークが、ぐったりした子ども首根っこをぶらさけてのご登場だ。

海に疲れて歩く気力も起きず、ミホークに荷物さながら運ばれているこの俺ですら、周りから聞こえてくるざわめきつぶりには、いから落ち着けと言いたくなるほどだった。

なのにミホークは説明ひとつせず俺を甲板に放り出すと、海軍本部へ行けと命令しただけ。

そして、キャプテンに案内されて艦長室へと退場。

そりゃ困惑もするぞ。

ミホークにぼてりと放り出されたままだった俺は、色々諦めて顔

を上げると、きょろりと状況を見回した。

俺を遠巻きにした水兵さんに、ぐるりと周りを囲まれている。

「いったいなんだこの子ども」

「まさかどこから拐ってきたのか」

「いや、あの格好。遭難者かもしれんぞ」

「あの鷹の目が人命救助?!」

「ないない」

「じゃあ、鷹の目の子どもとか?」

「ええっ」

いいのかミホーク、好き勝手言われているぞ。

そして俺がミホークの子どもってのは無理があるだろ流石に。

というか、前の人生合わせれば俺のほうが年上だ。

後を任されたおっさんと甲板に座り込んだままの俺が顔を見合わせた。

「うむ、あー」

コックのおっさんは困惑気味に顎ひげを擦る。

持て余し感が満々だ。

本当に申し訳ない。

「ゴクウ。おれ、ゴクウ」

とりあえず、挨拶だ。

挨拶が基本だ。基本が挨拶だ。

「おじやましていますよろしくおねがいします?」

「うむ」

厳格なじーさんがそれでも孫には相好を崩すかのように、目許が緩んだ。

「では、ゴクウ。一緒にお茶でもいかがかね」

自慢の茶葉を振る舞おう。

そうお誘いを受けたが、案内されたのはシャワールームだった。

臭いか、俺！？

第拾貳回 海軍と猿（後書き）

ほぼ野生生活だった岩猿は、小奇麗にしているつもりでも小汚いです。

清潔第一の軍人（それもコック）にとっては許容範囲外。

それでは、次回の講釈にて。

第拾参回 海軍レシピ

あの後シャワールームでひと騒動起こしたが、それについては省略だ。

なんにしる今は、食堂の一角でティータイムと洒落こんでいる。

素敵ヒゲでダンディーなおっさん、つまりはこの艦の料理長は、夜の仕込を終えて「さあ休憩に入ろう」と甲板に出てきたところで、あのフリーズ状態に出くわした。

そして、俺がシャワールームで騒いでいる間にもう一仕事。

ミホークにも自慢の紅茶を給しようとしたら、既に酒を飲み始めていたので、つまみとして即席カナッペを作ってきたらしい。

おつかれさまなことだ。

そんな話を聞く一方で、俺についても色々聞かれた。

あの全てを押し付けられた時に、情報収集も彼の仕事になったんだろう、確実に。

艦長がミホークの相手をしているとはいえ、何か聞き出せるとも思えないしな。

お茶と一緒に出されたのは、パンで作ったサマープディングだった。

これには海軍御用達のパンが使われている。

海の道が交わる島の特産品で、ドライフルーツをたっぷり使ったパンは保存が効き、固く焼く製法が他のパンよりもウジがわきにくいという長所を生み出した。

しかし日持ちしたところで、だんだん固くなって行ってしまふのはどうしようもない。

ただでさえ固いパンが日が経つにつれ更に固くなり、終いにはかなづちで割らないといけない程になるんだそうだ。

かなづちで砕いたパンとブラックベリーに似た果実をたっぷりと使いながら、大きなボール型に詰め込んでいく。

さて、1Jのベリー。

やはりとある冬島の特産品で、ベリーにしては皮が固く実も大きく、その日保ちのよさが特徴となっている。

加工する前の生の実も食べさせてもらったが、甘酸っぱくも濃厚な果汁が詰まっていた。

果実酒や砂糖煮、蜂蜜漬にすると更に保存が効き、プディングを作る時には大抵ベリー酒に漬けてあった実をあげて使うのだが、今回は俺用ということで、シロップに浸したベリーを使ったものを出してくれた。

酒でいいのに。

サマープディングを更にシンプルにした感じで、見た目もシンプル。というかちょっとフォークを入れることをためらう黒いかたまりだったが、しかしこれが食ってみると美味い。

なんでも料理長がまだ見習いの頃に師匠が作ってくれたケーキで、冷蔵庫なんてない時代からコックたちに受け継がれてきた海軍レシピのひとつなんだそうだ。

本当は型にはめたまま重石をして一週間ほど置いておくと旨味が増すそうだが、今回はお茶の葉を蒸らす程度の時間に短縮。

俺はその大きなボールサイズを完食した。

満足。

だって俺、手の込んだ料理できねえもん。

俺ができないからには、ござるたちにもできない。

キッチン設備がジャングルにあるわけもなく、だから料理というにはおこがましいくらいにシンプルで、食材を適当に切った後は『生』か『焼く』か『煮る』かという三択だった。

まあ、それで十分美味しかったから、努力も成長も工夫もなかった。

普段の食生活でもこのざまだ。

すいーっ？むりむり。

甘味といえば、新鮮なフルーツばかり。

それが不満ってわけじゃなくて、でもやっぱり誰かが手間隙かけて作ってくれるってというのは、特別だ。

そんなことを腹一杯になるまでに感謝を込めて伝えたけれど、多分何か勘違いされた。

というか、同情された。

俺の服装も誤解の増長に繋がった。

俺としてはお気に入りの一張羅による自慢のコーディネートなんだけど、あまりにもみすぼらしすぎたらしい。

ちょっと客観的に見てみれば、薄汚れてガリガリに痩せた子どもが、裾の破れている上にサイズの合わない、腰まわりは大きすぎてタイパンツみたいに端を折ったズボンだけをはいているだけなんだ。

上半身は裸。

せめてムキムキマッチョなら見映えもよかったかもしれないが、残念なことに青っ白いガリガリ君だしな。

ついでに身寄りもないといわれたら、そりゃまあねえ。

だから、服も借り物だ。

借りたのはもちろん水兵服。

小さいサイズがあったからと、海軍見習い用の服を貸してくれた。

それでも、サイズは大きめだったけどな。

水兵服。ここを強調してみよう。

つまりセーラー服なんだこれが。

料理長の後ろについて、甲板をぼてぼて歩いている時のこと。

背中に正義を背負ったごつい軍人たちに、微笑ましい顔で見られていた俺の微妙な気分は察してくれ。

第拾参回 海軍レシピ（後書き）

海軍レシピには釣り上げたものはなんでもいれる闇鍋ふう海鮮カレーなどが有名です。

全てを辛すぎる味付けで誤魔化せます。

それでは、次回の講釈にて。

第拾四回 デイナーとマナーとお子様ランチ

料理長の休憩時間が終わるまで、俺は食堂にいた。

その間、遅めの昼飯を食べにきたコックや、休憩中のクルー、仕事中の副艦長などが食堂に顔を出した。

これがまた、お笑い草でさ。

でかい図体の男たちが食堂の入り口から顔だけ出して、こっそり覗いているんだ。

雁首並べて恐る恐る覗きこんでいるさまは、はっきり言って可笑しかった。

料理長も俺と一緒に苦笑いしていた。

しかし、彼らにしてみれば、七武海襲来の報だけでも驚愕したというのに、その鷹の目が子どもを抱えていたというのだから、更に

びつくり。そして興味津々。

電光石火もかくやとばかりに艦内を噂が一気に駆け巡ったけれども、その際尾びれ背びれのせいで俺の存在が随分と不思議なモノと化していた。

曰く。

鷹の目のミホークが子どもを連れてきた。

鷹の目の子供か！

ありえないだろう。

そうか？

鷹の目がカームベルトで海王類の子どもを捕まえたんだとよ。

いや、どこかの島で戦ったらしい。

いやいや、海王類なんて可愛いもんじゃない。人間だ。人間こそが化け物だ。

てことは能力者か。

賞金首か。

何い！鷹の目が賞金首に負けただと！

バカか。鷹の目だぞ、ないない。

なんにしろ、鷹の目と同じ化け物だ。

そのバケモノが今食堂にいる。

迷走しているな。

でだ。

噂につられて食堂の前まで来たものの、どうしたものかところそりとの様子を伺ってみたわけだ。

その内、食堂に用があつたものから通りすがりまで、いったい何をしているのかと寄ってきて人数が増えてしまったらしい。

しかしまあ、期待はずれでゴメンねと言いたい感じだな。

中を覗いてみれば。

料理長お手製のケーキを食べていたのは、俺だ。

ミホークみたいな怪物じゃなくてただのお子様。

怖がってみせるのも愚かしい。

まずは腹を空かせたコックたちが食堂に入ってきて、食事を始めた。

それをきっかけに皆ぞろぞろと食堂に入ってきて、席はあっという間に埋まった。

脇のテーブルに置いてあったでかい薬缶から、つくりおきのお茶を銘々入れて飲みはじめる。

「よく食うな」

「うまいか？」

次々に声を掛けてくるもんだから、俺は口をもごもごさせながら「おいしい」を連発した。

そのうち誰も彼もに遠慮がなくなって、アルコールのない宴会みたいになっていた。

それともアルコール入ってたのか、あのテンション。

気づけば、猫可愛がりというか猿可愛がりされていた。

大きく武骨な手のひらで頭を乱暴に撫でられては、個人持ち込みの非常食だというチョコバーや、きらきらしたセロハンに包まれた飴、家族が持たせてくれたのだという焼き菓子や俺の目の前のテーブルに積み上げていく。

私物の持ち込みはいけなんだけどね、と苦笑いをしていた副艦長もウイスキーボンボンをくれた。

そして子供に何を渡していると料理長に怒られていた。

周りが自分のことは棚に上げて笑っていた。

お菓子があまりに増えすぎて、破れた帆で作った巾着袋をくれた。

飴を口に放りこんだ後のセロハンも合わせて全部入れて、腰のサッシュに赤い口紐を結びつけた。

なんだか、やることなすこと微笑ましく見られている気がする。

自分の子供とか孫とか思い出すのかな。

え、まさか愛玩動物。船のマスコットの猿？

まあそれでもいいけどな。

だって俺は、誰かとコミュニケーションを取れるってことが、嬉しかった。

いいよな。出会い頭に撃たれも斬られもしないって。

休憩時間の終わった料理長は夕飯の支度に取りかかるべく、去っていった。

俺といえば、次は甲板長に託された。

さてどうしたものかと首を傾げた男に、仕事の邪魔はしたくない旨申し出ると、「じゃあ俺の仕事を手伝ってくれ」という話になり、甲板掃除の指揮をとるそばで、俺も椰子割りを持って甲板掃除に励むこととなった。

仕事の邪魔にならない場所で子供を遊ばせておく感覚だったんだろっ、多分。

自分で言って空しくなるな、これ。

見た目には合っている？

うるさいよ。

その後も俺はいろんなクルーに託されて作業の手伝いをしたり、副艦長に艦を案内してもらったり。

夕飯は艦長室で取った。

艦長がホストで、ミホークがゲスト。俺はおまけ。

料理は豪華だった。

おふらんすっていつの？

ディナーでコースだ。

軍人さんってこんな贅沢が許されるものなのか？

ミホークが居るからなのか？

でももし、普段からこんな贅沢が許されているとしてもしないだ

ろっ。艦長の人柄的に。

それはともかく、白いクロスのテーブルと並べられたナイフにホーク。

どっしりと。

マナーてなにさ食べられるのかよと、恐怖におののいていたが、料理長が俺の前に置いたのはお子様ランチだった。

食べやすいよう先割れスプーンがついている。

「ありがとう！」

俺は料理長に礼を言ってスプーンを握った。

うへへへへ。

変な笑いが零れる。

傍からみたらずいぶんと崩れた顔をしていただろう。

でもだつてさ。

例えそれが子ども扱いだとしても心遣いが嬉しいというか、テイ
ータイムの時もそうだったけれども、誰かが俺のこと考えて何かし
てくれるっていいな。

ござるが肉を焼いてくれるっていうのとは、多分全然意味が違う。

料理だけの話でもない。

心がくすぐつたくて笑ってしまう。

そんな気分だった。

第拾四回 デイナーとマナーとお子様ランチ（後書き）

一人称で書いていると、どうにも過去形回想風ひとり語りになってしまい、手直ししようとしたら、なぜか当初5行予定の場面転換が伸びに伸び、場面転換どころか話が一步も進まなかった罫。ちなみに長引いた分を次回に持ち越したので、まだまだ先に進まない気配。どうしてこうなった。

それでは、次回の講釈にて。

第拾五回 ハンモックと夏島の主張

一枚のプレートに世界のすべてがつまっている。

そんな素敵なお子様ランチも、あっという間に食べ終わってしまった。

俺は退屈になってスプーンをがじがじとかじりながら、同席者に目を向ける。

海軍の士官はやっぱり海の紳士たれと、礼儀作法も仕込まれるんだらうか。

マナーもしっかりしていて、船の揺れをもともせずきれいに食べている艦長。

そしてミホークも、俺と酒盛りしていた時のワイルドな姿を想像もできないフォーク使いでステーキを食べている。

ていうか、うらやましいな。肉。

俺はスプーンをくわえたままで、めいんでっしゅなステーキを食べているミホークの手元を睨み付けた。

そりゃもう、羨ましさ120パーセントの目で。

ミホークはもちろん、俺が島でがつつり海王類の肉を食べていたのを知っている。

というわけで、見かねたのか肉を追加で頼んできた。

料理長が命じると、給仕として控えていたクルーのひとりが艦長室を出て行く。

元々追加オーダーの心積もりをしていたのか、それともクルーの食事を奪ってきたのか。

大皿の料理がすぐに登場した。

何かの丸焼きが、ででんと鎮座している。

でかい鳥の丸焼き　　じゃないな。え。カ、カエル？

カエルか？

ほらあれだ。

海の列車に体当たりしていたでかいカエル。

あれに見えるんだが。

と思いつつ。俺は躊躇なく丸焼きにかぶりついた。

ミホークがナイフとフォークを置きワイングラスを持ち、食事に一区切りがついたのを見てとって、艦長が話題の糸口を手繰りよせた。

「ゴクウくんのために、艦長室にもうひとつベッドを運びこまないといけませんな」

「えー」

俺はすぐに否定形を口にした。

それもマナー違反？

気にするな！。

「ハンモックがいい」

主張したいことをきちんと告げるほうが大切だ。

「なぜだ？」

ミホークが心底不思議そうに聞いてくる。

なぜだもなにも。

「だってミホーク。ハンモックだよ、ハンモック」

夏島と軍艦ではハンモックで寝るべし！

案内してくれたクルーがそう主張していた。

賛成だ。

第二甲板で見せてもらった、居住区にずらりと並ぶハンモックに、俺の心は躍り上がったものさ。

飛び上がって喜んで、そのままダイブ！

当直明けのクルーが寝ているのをものともせず義経のごとく八艘跳びを披露しようとして失敗し、クルーも枕も毛布も一緒に絡まって大変な騒ぎになったのも記憶に新しい。

うん。たのしかった。

「ミホークはハンモックで寝たことあるのか」

「ない」

「俺もない」

だから体験したいのだ。

「ミホーク。楽しいことを楽しまないのは人生損してる」

「ふむ」

ミホークが頷いたのをいいことに、俺は更なる提案を重ねた。

「じゃあ、ミホーク。一緒に居住区にハンモック吊るしてもらおう
！」

二人のやりとりをほほえましく見守っていた艦長が真っ青になっ
た。

「い、いえ。それは……」

まずいか？

俺は首を傾げたが、でもやっぱり不味いらしい。

がんばれ艦長と部屋の脇で控えていたクルーが、声を出さずにエールを送っていた。

ミホークと共寝は遠慮したいらしい。

結局、艦長室にふたつハンモックを吊るしてもらうことになった。

いいだろハンモック。

うらやましいだろハンモック。

ハンモックサイコー！

第拾五回 ハンモックと夏島の主張（後書き）

ああ、懐かしの海洋冒険小説の世界。
海と帆と。

大砲とラム酒とオイルと火薬と黒パン。

狭い砲甲板。

この軍艦は快適すぎてあまり思い浮かばなかったけれども、ここは海軍。

あの、湿気た焦げ茶色の世界にとても近いところ。

という文章を入れたかったけれど、諦めて削りました。

それをいったら、今回がまるっと前回分よりはみ出した分な上に、中身もないんだから削って次行け次と思いつつも、結局削れなかったんですが。

次回……次回も似たり寄ったり。

それでは、次回の講釈にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5586n/>

我こそは齊天大聖孫悟空也

2011年10月20日01時03分発行